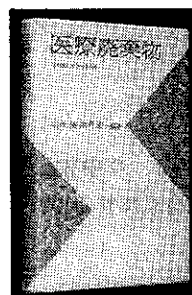


〈書 評〉

医療廃棄物——その適正処理を考える——

田中 勝・高月 紘編著

A 5 版 273頁 中央法規出版 1990年



システムが動くところには様々な不用物が産出される。人の人生は生命そのものがシステムであり、生活という社会システムがあり、さらに都市機能としてのシステムがある。それらの活動の不用物として多くの廃棄物が排出される。これまでも、一般廃棄物、産業廃棄物と、地域の都市化、生活の多様化などに伴って、特にその処理、処分をめぐる問題は年々、数は増加し、問題は複雑化し、保健所などにとってはますます頭を悩ます課題になってきている。それに加えて医療廃棄物の問題が取り上げられて久しい。

新たな課題が見えてくると、ガイドラインが示され、それに基づいた対応がなされることになる。講習会を開き、指導し、協力を要請する。実際の現場で担当する人たちにとって、ガイドラインの背景を認識しておくことは、そのような対応をする上で非常に強い武器を身につけることになるだろう。

本書は、医療廃棄物発生メカニズムや課題、医療廃棄物の内容やその現状、その処理に関する現状と課題などを述べ、さらに日本の行政的対応の現状や諸外国の対応などが、主な内容であるが、さまざまな立場の著者によって、具体的な例を出しながら非常に分かりやすく書かれている。特に、処理処分に関する章では、処理処分システムの一般論やそれぞれの方法についての原理や課題などが述べられており、医療廃棄物のみならず、一般廃棄物、産業廃棄物に関わる人にも

興味深い内容となっている。

そのまえがきに、指導にあたる行政の人たち、医療機関従事者、処理業者、そして医療廃棄物になりうる商品の製造販売に関する人たちに焦点を当て、医療廃棄物に関する現在わかっている知見をすべて網羅し、医療廃棄物に関するバイブルとなるものを目指したと記されている。

また、資料編として、病院及び医療機関から発生する廃棄物の管理に関する WHO レポートや感染性廃棄物の管理に対する EPA ガイドラインなどもあげられている。

そのような内容から、本書は時代的な要請にあったものといえ、厚生省から平成元年 1 月 1 日に示されたガイドラインの行間を埋め、背景の認識に大きな役割を果たすものと考えられる。

これからの課題として、医療廃棄物が医療システムの結果としての不用物であると考えれば、これに関わる一人一人が医療システムの中にいることを認識するところから、医療廃棄物の問題解決は始まるのではないと思われる。処理処分の問題とともに、不用物の排出を極力少なくする医療のあり方を、医療の実施側だけでなく、医療の受け手、あるいは主体としての住民とともに考える必要があるのではないだろうか。

岩永 俊博 (疫学部)